

「虹口史～1920年から30年の商業文化を中心に～」

金久実央

序 章：

本論文は、かつて日本人居留民区として栄えた上海市虹口区の商業文化から虹口区の地域的特長を、虹口の歴史・虹口の文化業・虹口の商業・日本人社会における商業の四つの観点から考察したものである。

今回はまず全四章の概要を述べ、ついで二章の虹口の商業文化を全文掲載する。

第一章：

本章は虹口の歴史と、商店通りとして栄えた「北四川路」の歴史を説明したものである。

虹口の地名は明代までは、沙洪と黄浦江の交差する場所であったことから「洪口 (hongkou)」との名前が付けられるが、清代から「虹口 (hongkou)」と「洪口 (hongkou)」の二つの名前が混在するようになる。(これは、当時の「虹橋」と言う名の橋が架かっていたために「虹」の漢字が使用されたものである)。同治帝の時代に「虹口」に統一されたのであった。ほとんどが耕地や漁村だったこの地域が世界各国の人種が雑居する様になったきっかけは、アメリカのブーン宣教師の来滬からであろう。1848年に虹口へとやって来たブーン宣教師はアメリカの勢力下のもとで蘇州河の北岸に住居を構え、ここにアメリカ租界が幕を開けることとなる。15年後の1863年にアメリカは現在の楊浦・虹口・閘北にまたがる南方部分を吸収し、アメリカ租界を拡大して行く。その9月にアメリカとイギリス租界は合併し「英米租界」が誕生する。アメリカ租界は更なる拡張を目指し、1893年に清朝政府の承認を受け、1899年に第4次土地章程が制定されて英米共同租界が拡張され、ここに「共同租界」が誕生したのである。この当時の虹口地区は華洋混在の状態であり各地域の文化は様々であった。工部局の管理下にイギリス人、アメリカ人、ブルガリア人、ロシア人、インド人が籍を置き、中国人についても広東・浙江・江蘇省の人々が職種の違う中において迅速に人口を増やしていった。また広東人の居留区として栄え、広東文化は虹口の中でも色濃く存在した。一方、浙江省や江蘇省の人々は土地的にも物理的にかけ離れていないために上海には同郷が多く、そのネットワークから多くのものが虹口内での中小企業に従事した。とくに江蘇人は工場設置に大変な力を入れ、メインストリート沿いから外れた場所に次々と小さな工場を開設していき、これも虹口地区の発展にもつながったのである。

虹口のメインストリートである北四川路が栄えるのは、1920年以降のことである。北四川路沿いの住人も増え、発展は日増しに進んでいく。最初に営業が盛んであったのは飲食店や劇場や商店であった。娯楽施設も大変充実していた。共同租界の中心部にある様な上級階層向けの劇場やバーなどはなかったが、ダンスホールや茶楼や浴室やマッサージ店、そして売春宿に至るまでの施設も存在した。また北四川路沿いの居留民に広東人が多かったため、ヴィクトリアホールやオデオンや広東大劇場などは彼らにより連日の賑わいを見せたという。

北四川路の3キロ程の通りは、中国人はもちろんのこと、イギリス人、アメリカ人、日本人などの人種のるつぼでもあった。これは裏を返して言えば、様々な国の管轄があると同時に互いを牽制し合うこともしばしばであった。商売が繁栄した反面、北四川路は無法地帯の場所でもあった。通りの裏では、毎日のように賭博や売春宿や麻薬の吸引所などのきな臭い商売が横行した一面も忘れてはならない。北四川路に映画館のブームが到来するまでは「虹口に行く」とは「博打を打ちに行く」という意味をもっていたほど、この裏社会も北四川路には充満していたのであった。

第二章：

虹口内の文化業を映画館業と劇場をテーマに書いた章。虹口は映画館の発祥地であることは知られているが、その成功の要因として4つの原因が挙げられる。

1つ目は共同租界の中心である南京路での開拓失敗である。この映画館の火付け役となったラモスも当初は南京路を狙って映画業を営んでいたが、南京路沿いには、競馬場、バーをはじめとする娯楽施設が混在していたために、ここでは珍しがられなかったことが失敗の第一の原因であろう。結局、ラモスは虹口へと戻り、再度奮起して「虹口シネマ」を開設する。

2つ目は映画が虹口内での中国人労働者に対する数少ない娯楽の一つであったことである。

虹口に居住した中国人労働者はストーリーを楽しむというよりは、映画が庶民的な値段で手軽に楽しめた娯楽であったことも大きな要因であろう。

3つ目の要因は中流階層の出現という時代背景である。それは生活以外にも娯楽施設を楽しむ余裕が出てきたことの何よりの証拠である。『良友』の創刊号にはオデオン映画館の内装の紹介、百貨店の宣伝など、生活へのゆとりを感じさせられる代物が次々と出現していることが読み取れ、また『良友』のような雑誌を読むことができる読者層が増加していたことも、注目すべき事実である。そして南京路で一度は営業に失敗した映画館であるが、虹口に戻り、人気とブームを確立し、そして再度南京路で受け入れられたことは何よりも興味深いことといえよう。

また粵劇に至っては（広東劇場も虹口が発祥地なのであるが）、上海で流行ったことにより、役者達は京劇の「麒派」の影響を受け、新たな粵劇のスタイルを生み出すことができたことも新たな発見である。

第三章：

本章は虹口の商業と商業街の研究である。虹口の中でもメインとして栄えた提籃橋と比較して北四川路の商業的特長を研究した。北四川路がメインストリートとして「華洋雜居」と呼ばれた由縁は、提籃橋のように来滬する外国人向けの商業で栄えた場所ではなく、中国人は中国人で、外国人は外国人で、おたがいに独立して各自の商業を営んでいたことにあるのではないかと私は考える。20世紀初頭に北四川路では具体的にどのような商店や職業が栄えたのかをこの章では見たい。20～30年代の虹口は教育文化団体の集中する場所でもあった。中産階級の主婦をターゲットにしたグラビア雑誌『良友』もこの北四川路沿いに1926年に誕生した。

北四川路の商業の特長は、北四川路の経営が「質良く、値段が安かったこと」である。南京西路などとは決定的に異なるのは、北四川路自体が租界の外れに位置しており、目と鼻の先は中国人貧民の居住地であったことである。しかしながら租界に属していた北四川路は文化人の往来や、外国人商人の往来もあり、様々な商品があるにもかかわらず、土地代も店の維持費も他の地域と比べて非常に安価だったことが大きな要因としてあげられる。また前章でも触れた映画館街の影響も多く、あらゆる人々がこの通りを闊歩していたことが伺える。提籃橋との相違点は通り沿いにこれだけの人々が行き来したことで、サービス業にも力を入れていたのではないであろうか。

そして、もう一つの要因は商店街としての街の形成が成されていたことである。トロリー電車の終点か海寧路に至るまでは小規模な商店、海寧路からは乍浦路までは大型商店が立ち並び、乍浦路上には飲食街というくくりが成されていたことも、北四川路が上海の中でも有数のメインストリートとして機能していた要因であろう。

第四章：

虹口内の日本人居留民区のなかで、栄えた内山書店の成功の要因について論じた章。

内山書店の歴史とその成功の要因に焦点をあてたものである。内山書店自体の研究は他にもなされているが、今回は内山書店成功の要因を北四川路の土地的特長から考察したものである。前章で述べてきたとおり、虹口のなかでも北四川路の文化水準は比較的高く、内山書店の所在地近辺の山陰路の東照里という長屋は、日本人、中国人の文化人の多くが居留していた場所でもある。彼らのような文化人が内山書店を好んで使用していたことも成功の大きな要因の一つにあげられる。

また、この山陰路には日本女子実業学校があり、この通りは学生達の通学路としても使われていたのである、この日本女子実業学校には横浜正金銀行に勤める子女が多く通っていた。文化水準の高い父兄達も内山書店に立ち寄り、本を手にとっていたのであろう。

そして、内山自身の文化水準の高さも挙げられる。高等小学校を中退して人生の大半を商人として歩んだ内山は、自身を学のない人間と称していたが、実際は知識人たちとの友情を深め、内山自身も何冊も本を出版し、人々の心を打つ作品を多く残している。

この原因は内山が生まれた岡山県後月郡に基盤があるのではないだろうか、山陽地方は日本の中でも文化水準の高い地域であった。内山の生まれた吉井町（現在の芳井町）は蘭学や漢学に優れた人物を生み出している土地柄で、内山の母方の祖父は漢学の阪谷朗廬の門に入り、漢書を読み、賦詩にも励んだ人物であるという。

内山が生まれ育ったこの吉井の町にも、内山の上海での飛躍の基盤がもともと備わったものではないかと私は考えるのである。

北四川路には様々な顔があった。先に触れたように知識人たちも居住した北四川路、上海で一旗上げようと何の基盤もなしに上海を目指した日本人たちが居住した北四川路、中国知識人たちも居住し、ときには身を潜めることもあった北四川路、多くの中国人労働者も行き来した北四川路。この北四川路のもつすべての顔を内山書店とその老板である内山完造は受け入れていた。内山自身も紆余曲折した人生を歩み上海にたどり着く、生まれながらにして備え持っていた教養がある反面、日本では成功は望めないと半ば人生を諦めた彼自身のコンプレックス、それを打ち消すような中国人達との出会いのなかで、日本人としての顔ではなく一庶民として全ての人に接したなど様々な顔を持つ北四川路の土地柄とも合っていた部分があるのではないだろうか。

以上のように、これまでの研究にはなかった観点から内山の成功の要因を考察したものである。

本論文のまとめ：

本論文はこの4つの章から虹口地区の地理的特徴を考察した。

以上のことから浮き彫りになった虹口地区の地理的特徴は3つある。

1. 物価が共同租界中心地よりも安価だったのは土地代の安さにあること。
2. 共同租界中心地と違い、通りを外れて間もない場所には貧民が住んでいたために古今東西のありとあらゆる人種が雑居していた。
(また、日本人においても様々な階層の日本人が居住していた)
3. 様々な人種や階層は混在していたが、共同租界中心地とは異なり学校も多く存在していたこともあり、土地自体の文化水準は高かった。

この特徴は今も四川北路には根付いている。そしてもう1つ例を挙げるとするならば「敗者復活的要素」が北四川路と虹口の土地にはあるのではないだろうかと私は考えるのである。

今回は商業文化のほんの一部分を垣間見たにすぎないが、これを切り口に、虹口の商業史のより本格

的な研究と、虹口独特のクレオール上海感の追求と虹口と、商業形態が似通うと言う新天地地域の商業文化の追求を今後の課題に上海と言う街と向き合っていきたい。

第二章 虹口の文化

虹口について調べていく内に非常に興味深いことに出会えた。それは虹口の文化業である。1920年代前後の虹口では中国人と外国人の営む商売が混在していた。それはサービス業、文化業においても共通することがいえる。この章では虹口の映画館と劇場について触れていきたい。

①虹口における映画館の発展

虹口は上海の映画館の発祥の地である。金風社の『上海案内』（1924）に「活動写真館（映画館の事）は静安寺路に大なるもの一つ二つあれば虹口に最も多く大・小 六ヶ所あり¹⁾。」との紹介がある。共同租界よりも虹口で栄えた娯楽施設の映画館。上海の映画史を交えてこの映画業について触れてみたい。

上海の映画は、1896年に閘北の唐家弄（現在の天潼路814弄35支弄）の私家花園徐園「又一村」内で放映されたものが最初である。西洋映画であったことは確認されているが、タイトルと内容は不明である。これは中国全土においても映画出現第一号であった。虹口で一般的に映画が姿を見せたのは1898年のことで、スペイン人のジャールンバイクが乍浦路のスケート場の野外で映画を放映したことがはじめである。その後、彼は同郷のスペイン人のラモス（A. Ramos）にこの映画器材をゆずり、自らは映画業から身をひいたのである²⁾。その5年後の1908年、ラモスは虹口区内ではなく、大馬路（現在の南京路）の茶館にて映画業を営む。そこでのラモスの工夫はつねに新しい映画フィルムを用意して客を退屈させないことにあった。この努力が実ってか「映画上映」は大変繁盛し、映画館を建設する資金をラモスは貯めることができたのだった。しかしながら当時の南京路には娯楽施設が充満していたために、南京路内での映画館建設は断念されたものと思われる。

その5年後の1908年にラモスは乍浦路のスケート場を買い取り、ブリキ小屋で、観客席も木製の椅子という簡素な映画館を建設し、「虹口（ホンキウ）シネマ」と名づけた（通称「ブリキ小屋」と呼ばれる）。収容人数は250人と規模的にはさほど大きくないが、これが上海はもちろん中国でも初の正式な映画館の開設であった。

そんな虹口シネマで最初に放映された映画は西洋映画の「龍巢（The Dragon Nest）」である。ここで注目すべきは虹口シネマで放映された映画の全ては西洋のものであったにも関わらず、観客の多数は中国人労働者たちであったことである³⁾。

ラモスが中国人労働者たちに映画を楽しんでもらうために様々な工夫を凝らしたのも大きな要因として挙げられよう。この当時は無声映画しか存在せず、物語を語るのは英語の字幕だけであった。ラモスは映画の上映中にピアノ伴奏をさせたり、劇のシーンに見合った音響をだす工夫をしていたのである。中国人の観客達は映画の内容を理解できないにもかかわらず、その演出であたかも自分が西洋にいるかのような疑似体験を楽しんでいたのだと思われる。観客にはリピーターも多く、顧客達によりラモスはさらに一大財産を築き上げることができたのだった⁴⁾。

その翌年1909年、ラモスはその財産で海寧路24号（現在の410号）に収容人数750人の上海第2の映画館「維多利亞（ヴィクトリア）ホール」を開設した。ヴィクトリアホールは「虹口シネマ」とは違い館内にはバーも設置されている外国人・上流階層を顧客のターゲットとして絞った映画館である。虹口に数多く存在する映画館のなかでもこのヴィクトリアホールが一番規模が大きいもので、いわば最初にできた「一流映画館」ともいえよう。場内の設備は純欧式で「ハリウッド」をテーマに作られ、750人も観客が収容可能であった。観客用の座席も非常に座り心地が良く、観客に対するサービスは徹底的に力をいれていたことが読み取れる⁵⁾。中国人客は言語の隔たりとチケットが高値であることからだんだ

んと映画館からは遠ざかっていくことになり、このヴィクトリアホールの客層は欧米諸国の客が8割、残りの2割を日本と中国の子女が占めていた⁹⁾。

また映画館以外でも、ヴィクトリアホールは歌劇およびダンスを演じる場として利用されることとなる。少し後の1915年の話になるが、上海初の有声映画を上映したのもこのヴィクトリアホールである（これは試映だったために、正式な有声映画を上映したのは百星映画館であった¹⁰⁾）。

その翌年の1910年ポルトガル系ロシア人のハスケル（S. G. Hertzberg）がラモスの「ヴィクトリアホール」に対抗し、北四川路52号（現在の四川北路1288号）に「愛普廬（アポロ）シアター」を開設した。ヴィクトリアホールの近くにあえて映画館を開設したのは、ラモスをライバル視し競争することによって、上海の映画業界の利益を追求することを目的としたためである。収容人数は600から700人ほどで、開設当初は好調に売り上げをのばしていたが、最終的にはラモス勢力には及ばないものであった。

この当時の北四川路の通りは商店も大変少なく閑散とした場所であった。そこにそびえるアポロシアターは赤レンガ造りで、アーチを描いた門のうえにガスランプが灯し、外観から西洋世界へと誘う様な演出を工夫していたのである⁸⁾。しかしここまで凝った外装ですらも、ヴィクトリアホールの演出には及ばなかったという。内部施設には当時上海における最新の機材を使用した、それでも観客の質や映画館の設備の全てはヴィクトリアに劣るものであった⁹⁾。

これらの映画館の開設は虹口地域が「映画館街」としての街を歩む皮切りとなり、70年近く経過した20世紀後半に至るまで、これらの映画館は残存し、上海人たちから親しまれたのである。

翌年1913年には北四川路の横浜橋北側の幻梳花園に幻梳外国映画館を開設。同年12月にはイギリス商人のリンジャム（A. Rumjahn）が海寧路、江西北路にある鳴盛梨園を改組して「愛倫（ヘレン）映画館」を開設した。1914年になると日本人商人も初の映画館である「東和映画館」を武昌路4号（現在の武昌路390号）に開設した¹⁰⁾。

1918年5月には北四川路と虬江路の交差付近（現在の四川北路1408号）に上海大劇院（英語名：アイシス映画館）を開設。これは愛倫影戲院の出資者である広東人の鄭子義とイタリア人の羅樂施が元の中華大劇院の場所に「愛倫」の分院として開設したものである。開場にあたっては広東人の曾煥堂が多額の出資をした。映画館史上初の中国人の経営する映画館であったが、中国映画は放映されることなく、映画の全ては西洋映画であった¹¹⁾。

たった10年の間に10件の映画館を開設した虹口、初期の上海の映画史発展において虹口は非常に重要な位置を占めたのである。租界虹口は映画館の別称の異名を取り、以前は「虹口に行く」ことは「博打を打ちに行く」との意味であったが、1920年代に入ると「映画を観に行く」の意味となったほどである¹²⁾。

②映画大王

この時期の映画館は北四川路、海寧路の周りに集中して開設されたが、その一方で、ヴィクトリア映画館の周りに次々と映画館を開かれ、ラモスは苦戦を強いられたのだった。売り上げの巻き返しをはかるためにラモスは「ラモス娯楽会社」を設立し、虹口以外の地区での映画館開設に挑戦する。

1914年には静安寺路（現在の南京西路）に「夏令配克（オリンピック）シアター」を開設。草創期の一流映画館としても知られた映画館である。1926年3月から中央影戲公司の傘下に入ったが、「アポロシアター」の経営者であるハスケルに再貸借された。1929年には初めてトーキョー映写機を導入し、一時再び隆盛を極めたが、施設の老朽化によって1934年10月に「孤独魂」を上映したのを最後に営業停止する。続いて「万国（チャイナ）映画館」を開設した年である1921年、卡德路（現在の威海路）に「卡德（カーター）シアター」を開設。フランス租界にも1921年霞飛路（現在の淮海中路85号）「恩派亜（エンパイア）シアター」を開設した。ヴィクトリアを含む五大映画館を上海で経営するラモスの当時の称号は「映画大王」であった¹³⁾。

虹口の映画館開設ブームの波は共同租界の娯楽業界にまでも影響を与えたのである。

③1920年代の映画館

ここで話を虹口に戻そう。上海の大規模な映画館のほとんどは虹口で誕生したものであった。20年代に入ると映画館はさらに加速度を増して虹口内に開設されることになる。

この時期に入ると、先ほども述べた「万国（チャイナ）大劇院」、上海演劇館（現在の永安映画館）、「奥迪安（オデオン）映画館」、『好萊塢（ハリウッド）大劇場』（現在の勝利芸術映画館）、「平安」などの映画館が虹口に誕生する。このなかで話題を呼んだ映画館は1925年に建てられた「奥迪安（オデオン）映画館」である。煙草業者永泰和会社の陳伯昭社長の出資で開設。中国人経営の映画館ではあったが、陳伯昭の営業する奥迪安電影会社がパラマウント製作映画の配給権を握り多額の利益を上げていたこともあって、映画の多くはパラマウント製作のものでその封切館でもあった。1928年からはコロンビアの独占放映権もえた¹⁴⁾。

陳伯昭の単独投資で設立したオデオン映画館は壮美で、外装も内装も全ての設備に対して最新の技術をはらっていた。後の章で触れるが、『良友画報』も実は虹口で生まれた雑誌であり、その創刊号にはオデオン映画館の内装が紹介されている。

百星映画館は1926年に初めてのトーキ映画を放映した映画館として知られている。他の映画館に比べて辺鄙な場所に建てられていたために百星映画館は徐々に二流映画館へと降格していったが、それでも料金は他の映画館に引けを取らぬものであった。1926年に開設された「平安映画館」はオデオン映画館に対抗して開設されたが、経営的には軌道に乗らず、程なく中央影戲会社の傘下に吸収されることとなる。

1929年には「国際映画館」が海寧路に開設されたが、その後の上海事変によりオデオン映画館、世界大劇場、中国演劇館、翔舞台の4件は戦火につつまれて全焼する。虹口内の14件の映画館は営業停止へと追い込まれ、かろうじて営業を続けていた残りの10件は日本人へ経営権を手渡された。唯一、虹口シネマ、万国、百老匯、東海の4件だけは苦難の中で中国人経営として戦時中の上海で残ったのである。

④映画の料金・客層

当時の映画館の料金は時間帯と座席によって区別されており、映画館の規模にもそれは左右された。ヴィクトリアホールと上海大戲院を例に挙げてみよう¹⁵⁾。

	ヴィクトリア	上海大戲院
一 等 席	3 弗	2 弗
二 等 席	2 弗	1 弗
三 等 席	80仙	70仙

中流階級以上の人々の鑑賞の様子は至って静粛で、欧米人の社会的規律を見習ったものとされた。

⑤現在も虹口に残る映画館

虹口には当時開設された映画館が残されているので紹介していきたい。

1. 永安映画館

1925年日本商人によって開設された「上海演劇館」である。現在の地番で四川北路1800号に位置する。「明星映画館」→「新東方劇場」→「永安大劇場」と名前を変えて、現在の永安映画館となった。1986年に階層され、翌年に竣工。現在は660人収容可能な映画館で二階がコーヒー屋、3階がクラブ、4階がカラオケ施設と5階がラボ室と言う娯楽施設として未だに活躍している¹⁶⁾。

2. 東海映画館

前身は「東海大劇場」1930年に中国人経営で幕を開けた映画館である。上海が戦火につつまれたなかでも細々と営業を続け、上海解放後の1954年に「東海映画館」に改名し、1990年に改装工事を終えた。現在は530人収容可能な映画館で、ダンスホールや卓球場や喫茶店やマーケットまで設けている娯楽施設となっている¹⁷⁾。

3. 勝利芸術映画館

「好菜場（ハリウッド）大劇場」の前身、地番で乍浦路408号。1925年に開設されたこの映画館は中国国内でも有名なマジシャン張慧沖の父、張志標により開設されたが、上海事変により営業停止を余儀なくされた。その後ドイツ商人、イギリス商人の手に渡されたこの映画館は「国民大劇院」に名前を変えて、1943年に日本商人の律吉悦夫の手に渡り、「昭南劇場」と命名される。49年に現在の名前へと改名し、ソ連革命・数学・科学・ニュース関係の教育映画を放映した¹⁸⁾。1989年に改装されたこの映画館は、その3年後の1992年に大改装され、翌年の1993年の「上海第一期国際映画祭」の6大会場の一つに指定をされたほどである¹⁹⁾。

4. 国際映画館

1929年にドイツ人商人によって建設された映画館。経営権は間もなくイギリス人にゆだねられるが、戦火の中では日本人の手に渡り、日本映画専用の映画館となった。終戦後は「国際大劇院」と名前を変え、1949年に「国際映画館」と現在の名前に改名した。解放後は中国映画を主に上映する映画館となり、勝利大劇場と並び、虹口にある映画館の中でも大規模な映画館として現在も大活躍である。現在の国際映画館は虹口のなかでも大規模な映画館。すぐ隣が勝利映画館。他の映画館は、劇場やゲームセンターなどが入った「娯楽施設」としての機能があるが、国際映画館は完全に映画館放映専用となっている。虹口で開設された映画館は未だに現役で活躍しているものも多く残っている。

⑥虹口の映画館密集地帯

1920年代より続々と開設された映画館ではあるが、それらが密集する地域は限られていた。大きく3つに分けると海寧路付近、北四川路沿い、提籃橋がその3つとして挙げられる。乍浦路・海寧路沿いの映画館街として、一番上海人にも親しまれている場所である。そこは好菜場（ハリウッド）大劇場、国際映画館、虹口シネマ、嘉興映画館、東和映画館の5件が密集する地帯であり、虹口を映画館街として認識させた地域である。

また北四川路沿いには永安映画館、オデオン映画館、提籃橋には東海・大名・東山映画館などが、娯楽施設としても開設され、虹口の娯楽文化の中心地として知られるようになったのである。最後に虹口でなぜここまで映画館業が歓迎されたのかを追及して行きたい。

⑦映画館は何故虹口で歓迎されたのか

では何故、映画館はここまで虹口で流行したのか、いままでのデータを参考に3つの原因が挙げられる。

1つ目は共同租界地での開拓失敗である。この映画館の火付け役となったラモスも当初は共同租界内を狙って映画業を営んでいたが、南京路沿いには、競馬場、バーをはじめとする娯楽施設が混在していた為に、共同租界の中で珍しがられなかったことが第一の原因であろう。結局、ラモスは虹口へと戻り、再度奮起して「虹口シネマ」を開設する。

2つ目はその虹口内での中国人労働者に対する数少ない娯楽の一つであったことである。虹口に居住した中国人はストーリーを楽しむというよりは、西洋疑似体験を楽しんだ。これが労働者たちに受け入れられた最大の要因である。南京路とは違い、庶民的な値段で手軽に楽しめた数少ない娯楽の一つであっ

たことも大きな要因であろう。

3つ目の要因は中流階層の出現という時代背景である。それは生活以外にも娯楽施設を楽しむ余裕がでてきたことの何よりの証拠である。『良友』の創刊号にはオデオン映画館の内装の紹介、百貨店の宣伝など、生活へのゆとりを感じられる代物が次々と出現していることが読み取れる。そして『良友』のような雑誌を読むことができる読者層が増加していたことも、注目すべき事実である。そして南京路で一度は営業に失敗した映画館であるが、虹口に戻り、人気とブームを確立し、そして再度共同租界で受け入れられたことは何よりも興味深いことといえよう。

[注]

- 1) 杉江房造『上海案内』日本堂書店、1924年、324頁
- 2) 《上海電影志》編集委員会編、『上海電影志』、1998年、20頁
- 3) 柯震「虹口、電影院的發軔地」『虹口史苑』、1989年、346頁
- 4) 前掲『虹口史苑』346頁
- 5) 前掲『虹口史苑』347頁
- 6) 前掲『上海案内』324頁
- 7) 前掲『上海案内』324頁
- 8) 前掲『虹口史苑』347頁
- 9) 前掲『上海案内』324頁
- 10) 前掲『上海電影志』613頁
- 11) 前掲『虹口史苑』347頁
- 12) 唐応光「虹口租界的由来及演變」『虹口史苑』、461頁
- 13) 前掲『上海電影志』613頁
- 14) 前掲『虹口史苑』347頁
- 15) 前掲『上海案内』324頁
- 16) HP上海電影院的誕生より
<http://news.eastday.com/epublish/gb/paper167/2/class016700001/hwz322584.htm>
- 17) HP上海電影院的誕生より
<http://news.eastday.com/epublish/gb/paper167/2/class016700001/hwz322584.htm>
- 18) 上海市虹口区人民政府編『虹口地区地名志』百家出版社、1989年、416頁
- 19) HP上海電影院的誕生より
<http://news.eastday.com/epublish/gb/paper167/2/class016700001/hwz322584.htm>

[参考文献]

杉江房造『上海案内』日本堂書店、1924年
上海市虹口区志編纂委員会編『虹口区志』上海社会科学院出版社、1995年
上海市虹口区人民政府編『上海市虹口区地名志』百家出版社、1989年
中国人民政治協商會議上海市虹口区委員会編『虹口史苑』、1989年
上海市虹口区档案館編『虹口相册』上海市虹口区地方志編纂委員会、2000年
羅小末主編『上海老虹口北部 昨天・今天・明天』同濟大学出版、2003年

《上海電影志》編纂委員會編『上海電影志』、1998年

[参考ホームページ]

上海電影院的誕生

<http://news.eastday.com/epublish/gb/paper167/2/class016700001/hwz322584.htm>

淺談麒派芸術特点

http://www.tianchan.com/qipai/Article_Print.asp?ArticleID=101

内山書店ホームページ

<http://www11.ocn.ne.jp/~ubook/company/history.html>